チリ共和国との震災教訓の共有（河北新報社「むすび塾」実施支援）

掲載日:2014 年 1 月 11 日　　(C)河北新報社

（第三種郵便物認可）　河北新報　平成２６年（2014年）１月１１日（土曜日）特集　（１２）

海外編　　防災・減災のページ

巡回ワークショップ　@チリ

むすび塾

慰霊碑設置 伝承誓う

コンスティトゥシオン市

国境を超えた史上最大震災の教訓を共有し、地震や津波への備えに生かそうと河北新報社は昨年12月6、8の両日、巡回ワークショップ「むすび塾」を南米チリの2カ所で開いた。国際交流基金との共催で、海外開催は昨年4月のインドネシアに続いて2度目。チリ沿岸部は2010年のチリ大地震津波＝用語＝で大きな被害を受けた。減災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長を進行役に、東日本大震災の語り部活動をしている宮城県南三陸町の農業後藤一俊さん（66）、石巻市の主婦佐藤麻紀さん（42）と現地の住民が被災後の心境や、防災・減災について話し合った。

チリ大地震に住民約100人が犠牲になったコンスティトゥシオン市では8日、市役所でむすび塾を開き、津波で家を失った住民3人が参加した。経験と教訓の伝承について意見を交わし、悲劇を繰り返さないことを誓い合った。

市内を流れるマウレ川河口部のオレゴ島は、キャンプ中の約50人が津波で命を落とし、市最大の被災地となった。息子の市民フェリペさん（当時9）を亡くしたペドロ・パレラさん（37）は「家族と市内に避難した後、島をすむ姿を眺め、津波で家を失った住民3人が参加した。経験と教訓の伝承について意見を交わし、悲劇を繰り返さないことを誓い合った。

日本にも被害を及ぼした1960年のチリ地震で、同市は人的被害が小さかったほかが、被災した建物は撤去された。津波に関する記憶は年々薄れ、市民の津波への警戒心は弱かったという。当時は地震や津波が神の罰だと見なされ、公の場で語り合うことが宗教的にタブーだったことも影響したとみられる。

沈痛な面持ちの参加者に、木村理事長は「将来の被害を減らすため、チリ大地震津波のことを伝えていけばいいのだろうか」と問い掛けた。

参加者は、遺族がお金を出し合って十字架を中心とした慰霊碑を設置したことを説明した。遺族は、毎月のように訪れて祈りをささげている。キャンプ場では政府が買い上げ、島は現地住民が犠牲になった。十字架があることで、家族での取り組みも話した。ソフィア・グティエレスさん（38）は4歳の長男を失った経験を涙ながら振り返り、「他の子どもは、同じ目に遭わせたくない。成長したときに見せるために、被災当時の雑誌や写真を保管している」と強調した。

市民の間では地震後、強い揺れの後は逃げるという考えが浸透している。参加者は、防災意識の持続のためにも、伝承がなくてはならないとの認識を共有した。

木村理事長は「地震のたびに、津波は形を変えて襲ってくる。到達までの時間や波高など経験にとらわれすぎることも危険だ」と助言した。日本では津波被害を受けた建物を震災遺構として保存する動きが活発化している。チリには老朽化建物が残っている。伝承に効果的なので、保存に取り組んでほしい」と訴えた。

現地住民と東日本大震災の被災者が被災体験を共有したむすび塾。筋肉質は昨日にオレゴ島に渡り、慰霊碑の前で現地の被災者と献花などの心境などを語り合った

? チリ大地震津波　2010年2月27日午前3時34分ごろ、南米チリ中部沖合でマグニチュード（M）8・8の巨大地震が発生、高さ最大30メートルの津波を引き起こした。チリ内務省による と、国内で554人が犠牲になった。住民の全半壊は約7万戸に上った。国は被災中所得者世帯を対象に約1万戸の復興住宅の整備を計画。建物ほか、土地や融資金も提供し、13年11月時点で約19万戸を完成させた。津波は日本の太平洋沿岸を襲い、養殖施設の損壊など漁業関連の被害は60億円を超えた。

むすび塾に参加して

オレゴ島で犠牲になった息子のフェリペのことを思い出してもらえるよう、自分が運営するサッカー教室にフェリペの名前を付けた。今では家族が安心、地震があったら各自がそこに逃げて落ち合うことにしている。
＝ペドロ・パレラさん（37）

津波が市街地を襲う光景を見て「地獄がやってきた」と感じた。津波の知識はなかったが、直感で山に逃げた。津波は誰にも止められない。毎回、姿を変えると聞いた。地震が起きたら、奉章の避難を始めたい。経験する後、船に乗る観光客にも、避難路を考えるよう助言している。
＝ソフィア・グティエレスさん（38）

オレゴ島で娘2人と孫1人を亡くした。災害のことを伝え続けるため、遺族でお金を出し合って島に慰霊碑を建てた。島に立つ十字架を見れば、市外の人も過去に悲惨な出来事があったことが分かり、警戒してもらえるはずだ。
＝サンドラ・コントラスさん（48）

石巻市 主婦・佐藤麻紀さん（42）

語り部から　互いに話せる場必要

当初はチリの人々に受け入れてもらえるか、不安だった。震災体験について互いに話をしてみて、家族を守りたいという気持ちは、国境に関係なく一緒だということが強く心に残った。

東日本大震災では、避難した施設まで津波が押し寄せ、山の斜面を駆け上がって逃げた。人間中の祖母と助けに行った母は、津波の犠牲になった。チリ大地震津波で子どもランティアのような活動がなかったことを残念に思う。しかしチリでは協議が進み、チリ大地震津波で子どもの遺体を捜した体験談も、祖母と母を捜索した自分と重なり涙が出た。言葉は出なかった。

「東日本大震災では、避難し祭と悲しさを少つけたときに、慰め合えた気がした。

本当は難しがつらさを吐き出したいし、泣きたいのだと思う。しかしチリでは協議が進み、